

# こころに吹く風

平岡昇修

2016年7月2日

——東大寺の大仏さまの開眼から千二百五十年。大仏さまが人々の心をとらえ続けた理由は。

大きいということは、すごいことです。それだけで大きな力を持ちます。聖武天皇は、飢饉や疫病が相次ぎ、政治的にも不安定な時代に、大きな仏像の力で日本を治めようとされました。

大仏さまはビルシャナ仏ですが、阿弥陀さまだと考え、手を合わせる人もいます。「大きな仏様だから、自分の願いをかなえてくれる」と思い、宗派を超えて、拜まれるのですね。そんな人には、華嚴哲学が何かということはありませんし、それはそれでいいと思います。大仏様は人によってとらえ方は様々ですが、大きいから包容力を感じる。おおらかさの象徴なのですね。

それに、大きな大仏さまの入る場・大仏殿があるということも、世界に類のないことです。大仏さまと同じお堂の中に入ることによって、自分も仏様の世界に入っているという充実感を、人々に与え続けたのでしょう。

——千二百五十一回目の今春の修二会（お水取り）では、堂司の大役を勤められましたね。

修二会は開眼の一年前から始まり、戦時中も一回も途絶えることなく営まれてきました。堂司は行の進行を司るコンダクターですから、とにかく段取りを間違わないように気を使いました。

修二会では、練行衆が皆様の代苦者として罪を懺悔し、天下泰平などを願います。今年は、アメリカで起こった同時テロ事件などの被害者を悼み、平和な世界になるように祈りを捧げました。

三週間は、家族とは火を別にする別火の生活を送り、食事は原則として昼の一回だけになります。「大変ですね」と言われますが、肉体的には慣れるので、苦労はしません。精神的な方が大変です。団体生活を送る練行衆十一人は、行の間は同じ船に乗っているようなもので、けんかをして外へ飛び出す訳にはいきません。和を保つのに苦心しますが、同じ釜の飯を食べ、一緒にお風呂に入ることによって、東大寺のお坊さんの結束は強くなっていきます。

行に入って、昔ながらの電気のない灯明の生活を送ると、いろいろなことが分かります。例えば、灯明の明かりの赤いこと。読み癖をつけるためにお経に書き込んだ朱の字が、灯明の下では火の赤さに消されて、読めなくなります。二月堂の中は、白、黒、赤の三色しかない世界です。行を終えて、普段の生活に戻ると、「テレビには、こんなに多くの色がついているのか。なんと色彩豊かな世界に住んでいるのか」と驚きます。修二会で千二百五十年前にタイムスリップし、今の生活を振り返ることも出来る訳です。

——東大寺は教理を学び、学僧を育てる任務もありましたね。

東大寺は八宗兼学の寺と言われ、広く仏教を学ぶ寺でもありました。明治時代に一寺一宗となり、華嚴宗の寺になりましたが、教学の流れは、勸学院が引き継いでいます。しかし、最近のお坊さんは忙しくて、じっくり勉強する時間がなくなっています。以前は、奈良の寺院はひっそりしていましたが、今では観光客が増えて、施設管理などで大変です。お坊さんの数が減っているから、一人で兼務する仕事も多くなっています。

しかし、代わりに勸学院は一般の人が仏教を学ぶ場になりました。ここで開かれる仏教講座は、お寺と一般の人との接点になっています。

——日本人は宗教心が弱いと言われますが。

結婚式はキリスト教で、お葬式は仏教で、そして初詣では神道で行い、日本人はバラバラと言われますが、言い換えれば、おおらか、鷹揚ということです。今、イスラム教とキリスト教の世界が対立していますが、日本も一つの宗教しかないのであれば、対立の渦の中に入ってしまう。いろいろな宗教を受け入れる力を持っている日本は、多くの宗教が共存するという立場に立つことが出来ます。アフガニスタンに対する援助でも、イスラム社会に対してと考えるのではなく、アジアの一員として援助すると考えることが出来ます。日本人のフアジー性とも言えますが、それはいいところでもあると強調していった方がいいでしょう。

宗教というのは、押しつけるものではなく、その人が望む時に手にすることができるものだと思います。若い人に宗教心を持つと言っても、無理な話です。「自分は生かされているのではなく、生きている」と考える時期はあってもいいのじゃないですか。試練の時、余命が少ないと知った時と、その時々になれば自然に宗教を考えるようになる。宗教は常に門戸を開いて待っているものと言えるでしょう。